

項羽政權の成立 (重近啓樹先生追悼記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴田, 昇 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007060

項羽政権の成立

柴田昇

一 はじめに

秦末反乱の口火を切った陳勝呉広の乱は半年程度で終息したが、陳勝蜂起をきっかけとする抵抗運動の拡大は戦国国家の枠組みを前提とした諸王の復活に至った。趙では陳勝政権が派遣した軍団の将軍が自立して趙王となり、さらに趙王が燕に派遣した軍の長も燕王として自立した。斉・魏でも旧王家の一族が王位に就いた。陳勝政権末期の中国では、多数の反秦集団が活動を開始した結果、韓を除く戦国六国の並立体制が出現していた。

このような動向の中で、特に多くの有力な反秦武装集団が林立する空間だったと思われるのが旧楚の領域である。陳勝は陳で張楚を建て楚王を名乗ったが、その実効的支配領域は三晋に接する楚域北西部にとどまった。旧楚領域の実質的な再統合には陳勝政権崩壊後もある程度の時間を必要とした。

旧楚領域における反秦抵抗勢力の統合に主導的な役割を果たしたのが項梁・項羽である。項梁・項羽に関しては、特に

項羽の天下統一が「失敗」した原因を探るといふ問題意識からの大量の研究がある⁽¹⁾。また近年、秦末漢初期における「楚」の時代の存在意義がしばしば強調されている。この点について田余慶は秦漢の間をつなぐ楚政権の性格に関する先駆的な検討を行い、戦国期と秦末漢初の国際関係の関連性を論じて以後の研究の方向性に大きな影響を与えた⁽²⁾。田余慶の成果に強い影響を受け、陳蘇鎮は六国中で楚が最も強く滅秦を望む要素を持っていたことを指摘した⁽³⁾。また李開元は秦末漢初の政治的動向を詳細に分析し、楚懷王の時代を戦国復国運動の達成された王政復興期、項羽の十八王封建の時期を列国衆建期と位置づけた⁽⁴⁾。さらに藤田勝久は秦末漢初史の展開を秦・楚という二つの社会システムの相克関係としてとらえる視点を示し、佐竹靖彦は『史記』等に加えられた書き換え・粉飾を指摘しつつ項羽と楚漢戦争の全体像の復元を試みている⁽⁵⁾。

これらの研究成果から学ぶべき点は当然多くあるが、項羽政権成立過程で発生する諸事象への評価に関して一致しない点も多く、この時期の政治過程にはまだ少なからぬ検討の余地がある。筆者は別稿で『史記』項羽本紀の性格について検討し、そこで項羽と劉邦を対照的な存在として描き出そうとする『史記』の叙述の傾向について若干の分析をおこなった⁽⁷⁾。秦末漢初の政治過程を理解するためには、基本資料たる『史記』の編纂方針にかかっている種々のバイアスを念頭に置かねばならない。本稿は、項梁・項羽集団の歴史的意義について検討するための基礎的作業として、『史記』の叙述傾向に留意しつつ、蜂起から十八王封建までの項梁・項羽集団の成長過程を跡付けることを試みるものである。

二 項梁集団の成立

二一 項梁集団の蜂起

『史記』陳涉世家及び秦楚之際月表によれば、陳勝が大沢郷で蜂起したのは秦二世皇帝元年七月である。陳で王位につい

た陳勝は東西南北への派兵を行い、その軍団の一部は一時は函谷関を越えて戯に至った。しかし秦将章邯の軍によって撃退され、それをきっかけに軍団内で内紛が発生、蜂起の半年後には陳勝も死亡している。しかし陳勝の死が楚全土に知れ渡るにはさらに数か月の時間を要した。

会稽の反乱は陳勝集団蜂起から約二ヵ月後の九月に起こった。当時呉中で地域の信望を集めていた項梁に対して、会稽守通は項梁と桓楚を将軍としての決起を持ちかけた。それに対して項梁は項羽を使って会稽守通を殺害、さらに会稽守配下の百人近くを殺し、呉中の人々を従え、周辺諸県から精兵八千人を吸収した。これらが決起時点での項梁集団の中核を構成した。またその頃亡命して沢中に潜んでいた桓楚は項梁の軍に従ったらしく、後の宋義殺害の際には項羽の使者として桓楚が懐王のもとに派遣されている。秦末の沢中はアウトロー・亡命者たちの群れ集う、政治的支配の網の目から漏れ落ちた空間であることが多かった。沢中に亡命していた桓楚の合流は、それとともに沢中の無頼たちも項梁集団に合流していた可能性をうかがわせる。

項梁集団は会稽制圧直後しばらく目立った動きを見せておらず、秦楚之際月表の二世二年十月十二月にも関連記事は見えない。このことは、初発時の項梁集団が明確な方針を持っていなかったこと、項梁の決起が会稽周辺を制圧・支配すること以上の具体的な目標のない突発的なものだったことを示すと考えることができるかもしれない。項梁集団は陳勝政権とは直接的な関係を持たない地域的勢力として楚域東方南部でスタートした。

項梁集団の次の動きが秦楚之際月表に見出されるのは二世二年端月の「涉将召平矯拜項梁為楚柱国、急西擊秦」という記事である。決起後の項梁集団にまず接近したのは、召平なる人物だった。項羽本紀には次の記事がある。

広陵の人召平は陳王のために広陵を従えようとしていたが、未だ下し得ていなかった。陳王が敗走し、秦軍が近づいていることを聞き、渡江して陳王の命と偽り項梁を拜して楚王の上柱国とした。そして言った。「江東はすでに平定

された。急いで兵を率いて西に向い秦を討て」。項梁は八千人を率いて長江を渡り西に向った。

広陵人召平於是為陳王徇広陵、未能下。聞陳王敗走、秦兵又且至、乃渡江矯陳王命、拜梁為楚王上柱国。曰「江東已定、急引兵西擊秦」。項梁乃以八千人渡江而西。

召平は陳勝の敗走に対応して陳王の命と偽って項梁を上柱国に任じたという。このことは明確な目標を持たない地方勢力にとどまっていた項梁集団に新たな行動を起こすきっかけを与えた。召平により陳勝集団の一翼という位置づけを与えられた項梁は八千人を率いて反秦行動を開始することになる。

二―二 項梁集団の拡大

渡江した項梁集団は、秦楚之際月表によれば二世二年二月に、約二万人を擁した東陽の陳嬰集団と合流する。東陽県で蜂起した集団が肥大して数千人に達したため有力なリーダーが必要になってきた時に少年たちは、「長者」と称されていた陳嬰に長となることを請うた。陳嬰は辞退したが少年たちに強いられて長となり、さらに集団が二万に肥大した頃、少年たちは陳嬰を立てて「王」とすることを望んだ。

少年たちの要望に対して陳嬰は自らの貴種性の欠如を理由にそれを退け、項梁集団への合流という道を選ぶ。自らに従う集団の生存・拡大戦略として陳嬰が選択したのは、王として自立しての地域の掌握ではなく、陳勝政権の一部を称する楚の名族の軍団と合流することだった。

続いて項梁集団は淮河を渡って黥布・蒲將軍の軍団と合流、六〇七万の軍となって下邳に至った。陳涉世家には次のような記事がみえる。

陳勝の故の涓人だった將軍呂臣は蒼頭軍をつくり、新陽で決起し、陳を攻めてこれを下し、莊賈を殺し、再び陳を

楚に回復した。……秦の左右校は再び陳を攻め、これを下した。呂將軍は敗走し、兵を收容して再び集まった。鄱盜當陽君黥布の兵と連合し、再度秦の左右校を撃ち、これを青波で破り、またもや陳を楚に回復した。ちょうどその頃、項梁が懷王の孫の心を楚王とした。

陳王故涓人將軍呂臣為蒼頭軍、起新陽、攻陳下之、殺莊賈、復以陳為楚。……秦左右校復攻陳、下之。呂將軍走、収兵復聚。鄱盜當陽君黥布之兵相収、復擊秦左右校、破之青波、復以陳為楚。會項梁立懷王孫心為楚王。

これによれば黥布は項梁集團との合流以前から楚域西方で旧陳勝軍を援助しつつ独自の反秦戦を展開していた。⁽⁸⁾ 黥布集團はもともと黥布列伝に、

黥布は酈山に送られることになった。酈山の刑徒は数十万人おり、黥布はその中の徒長豪傑皆と親しくつきあった。そして自らに従う一味を連れて脱走し、江中で群盜となった。

布已論輸麗山。麗山之徒数十万人、布皆与其徒長豪傑交通。迺率其曹偶、亡之江中為群盜。

とあるように酈山の刑徒たちからなるアウトロー集團であり、それに郡君貴冑の兵が加わった楚域南部の一大武力集團だったものと見られ、この時点で楚域南方の主要な勢力の連合が完了することになったものと考えられる。

さらに項梁集團は当時旧楚域東方北部に一大勢力を築いていた秦嘉集團との抗争を開始する。秦嘉集團は陳勝政権成立期の楚国東半北辺に乱立した都市単位の反乱集團が秦嘉のもとに結集した集團であり、⁽¹⁰⁾ 項梁集團の北上開始とほぼ同時期の二世元年端月には景駒を楚王に擁立している。⁽¹¹⁾ 張良は当初秦嘉集團への合流を目論み、⁽¹²⁾ 劉邦も豊県奪回に際してまず頼ったのは秦嘉だった。⁽¹³⁾ 当時の楚域では秦嘉集團は項梁集團以上の評価を得ていたものと考えてよい。

項梁は陳勝政権の一翼を担う立場から秦嘉集團を糾弾した。

「陳王は反秦の先駆けとなり、武運つたなく、今どこにおられるかわからない。今秦嘉が陳王に背いて景駒を立てる

のは、逆無道であろう」。そこで兵を進めて秦嘉を撃った。秦嘉軍は敗走し、これを追撃して胡陵に至った。再び一戦したが一日で秦嘉は死し、軍は降伏した。景駒はなおも敗走したが梁地で死亡した。項梁は秦嘉軍を併合し、胡陵に布陣し、軍を率いて西に進もうとした。

「陳王先首事、戦不利、未聞所在。今秦嘉倍陳王而立景駒、逆無道」。乃進兵撃秦嘉。秦嘉軍敗走、追之至胡陵。嘉還戦一日、嘉死、軍降。景駒走死梁地。項梁已并秦嘉軍、軍胡陵、将引軍而西。(項羽本紀)

独自に楚王を擁立した秦嘉を陳王に対して「逆無道」を為す者と評した項梁は、秦楚之際月表によれば二世二年四月には秦嘉・景駒を殺害し、その軍団を吸収した。この時点で楚国東半分には項梁らの勢力に対抗し得る集団は存在しなくなっているようである。

項梁集団の成長過程に関する一連の記事からは、この時期の反秦武力集団における行動パターンの多様性を見出すことができる。会稽の場合のように郡守自身が反秦行動を開始しようとするケース、秦嘉の場合のように都市単位の多くの反秦集団が統合・肥大して独自の王を立てるに至るケース、項梁のように陳勝政権支持の立場を標榜しつつ集団を拡大してゆくケースなど。また陳嬰の場合のように、県レベルで少年たちが独自の王を立てようとする動きも見られた。陳勝政権の支配力は楚域全体に及んでいたわけではなく、自立的反秦武装集団が林立していた当時の楚では複数の王が並行して立つことも大いにあり得た。

また、陳勝の死が確定した時、項梁は諸別將を薛に集めて今後の方針を定めたという。陳勝政権崩壊期の楚では、東半北部に秦嘉によって諸集団が統合された一大勢力が成立しており、これに対して東半南部の雑多な集団が項梁を中心に統合され一大軍団に成長し始めていた。九江方面の楚域南部には鄱君呉芮の娘婿で百越兵を含む軍団を率いる黥布がいた。そして三晋と接する西方は秦軍によって蹂躪されていたが、呂臣率いる旧陳勝政権軍が活動を続けており、それらは黥布

軍と連合することで陳を中心に楚域西部に独自の勢力基盤を築いていた。薛の会議までに黥布集団は項梁集団に合流しており、秦嘉集団も項梁集団によって吸収された。そして薛での懷王擁立に前後する時期に呂臣が項梁集団に合流することで、旧楚地域の主要な反秦集団は連合を完了したものと思われる。

三 楚王の擁立と項羽集団の成立

三―一 懷王の擁立

薛の会議で范増により戦国楚の子孫を探し出して王位に就けることが提起された。この時点までの項梁集団では陳勝を楚王と認めることに特に疑問は抱かれていなかったものと見られる。陳勝は自ら王を称し、秦嘉は景駒を楚王に立てた。陳勝蜂起時に陳勝軍団と別れて東方に進んだ葛嬰も進出した先の九江で襄彊を王位に就けている。先に陳嬰の例を挙げたように、これ以外にも独自の王を立てようとする動きはあった。この時期の楚域においては旧王族を王に立てることは自明の方向性ではなかったが、薛の会議の結果、范増の建言に従い戦国楚王家の末裔が王位に就けられることになった。

項梁はその言を是とし、楚懷王の孫の心を民間から探し出し、羊飼いとなっていたのを、立てて楚懷王とし、民の望むところに従った。陳嬰は楚の上柱国となり、五県を封ぜられ、懷王と盱台に都を築いた。項梁は自ら武信君と号した。

於是項梁然其言、乃求楚懷王孫心民間、為人牧羊、立以為楚懷王、從民所望也。陳嬰為楚上柱国、封五県、与懷王都盱台。項梁自号為武信君。（項羽本紀）

項羽本紀に「陳嬰為楚上柱国、封五県」とあり、秦楚之際月表の二世二年七月の項にも「陳嬰為柱国」と記されている

ように、楚王家復興の実現により陳嬰は上柱国となった。また楚の都とされた盱台は陳嬰の本拠地である東陽県の北に隣接しており、項羽本紀は陳嬰が「与懷王都盱台」と記している。これらのことは懷王擁立期の楚において懷王に最も近い位置にいたのが陳嬰だったこと、懷王の親衛隊的な位置を占めたのが項梁集団に合流した段階で二万を動員していた陳嬰集団だったことを推測させる。項梁は召平の矯命により上柱国とされていたが、楚懷王によってそれが承認されたかどうかは不明で、また項梁はこの後も前線部隊として軍事活動に邁進しており、懷王擁立後の楚の政治機構内で主導的な地位にあった形跡は見出し難い。

そして以上のことから推測されるのは、懷王即位の時点では陳嬰と項梁の政治的位置に大きな差はなかったのではないかとということである。そもそも項羽本紀に陳嬰集団と連合した時のことを、

項梁は八千人を率いて長江を渡り西に向った。陳嬰がすでに東陽を下したことを聞き、使者をおくり連合してともに西進することを望んだ。

項梁乃以八千人渡江而西。聞陳嬰已下東陽、使使欲与連和俱西。

と記しているように、項梁にとって陳嬰は自軍との連合を望むべき有力勢力のリーダーだった。陳嬰は名族に従うとの名目で対秦戦に参加したが、陳嬰集団と項梁集団は実質的には同盟軍というべきものだったことも十分想定可能だろう。

別稿にて論じたように、項羽本紀は劉邦のネガとして造形された項羽に対する顕彰的な性格を持っている。故にその記述は楚の中心に常に項梁・項羽がいたことを強調する叙述になりがちである。⁽¹⁵⁾しかし楚懷王擁立後の動向からすれば、王の側近として楚政権内部で最も重用されたのは二万の軍団を結集した「長者」陳嬰だったと見なければならぬ。懷王政権成立以後の項梁は楚の軍事外交部門の有力者の一人ではあったが、楚国政権中の最有力者だったわけでは必ずしもなかった。

三十一 項梁の戦死

陳勝政権の滅亡後間もなく、秦将章邯の軍によって魏王が臨済で包围され、魏王咎は齊・楚に救援を要請した。これを受けて齊・楚の軍が救援に駆けつけるが、章邯軍に大敗し、この戦いの結果、齊王田儼・魏王咎らが死亡した。¹⁶

魏王咎の弟豹は楚に逃れ、楚懷王から数千の兵を貸与されて魏の復興に向かった。¹⁷ また田儼の弟の田栄は敗残兵を集めて東阿に入った。この頃齊本土では田儼の死を知り、故齊王建の弟の田假が王位に就いた。章邯が東阿を包围したのは田栄軍と齊本土の軍の連携を阻止し齊国勢力の各個撃破を目論んだものと思われる。これに対して田栄は楚・項梁軍の救援を得て章邯軍を撃退し、その勢いで齊に戻って齊王假を破り田儼の子の田市を齊王とした。田假は楚に逃れ、その相だった田角、将だった田間は趙に逃れた。¹⁸

章邯を破った楚軍は東阿を出発点とする対秦戦争の開始にあたり齊の田栄に使者を送り対秦戦争の共闘を請うたが、田栄は田假が楚に保護されていることを理由に拒否した。そのため楚は項梁を中心に独自に出兵し、南進して定陶で秦軍をやぶった。²⁰

項羽本紀によれば、この頃項梁には秦軍を軽視し驕った風が見られた。それに対して宋義は諫言したが、項梁は聞く耳を持たなかったという。宋義は自らの諫言に耳を貸さない項梁の敗北を予想、その予想は的中し、項梁は定陶で秦軍に敗れて死亡、西方に侵攻していた項羽と呂臣の軍は彭城まで撤退することになった。

楚軍が定陶で敗北したことで、懷王は恐れ、盱台から彭城に移り、項羽・呂臣の軍を自ら併せ率いた。呂臣を司徒とし、その父である呂青を令尹とした。

楚兵已破於定陶、懷王恐、徙盱台之彭城、并項羽・呂臣軍自將之。以呂臣為司徒、以其父呂青為令尹。(項羽本紀)
楚軍の敗退、項梁の戦死に対して、秦楚之際月表によれば二世二年九月に懷王は盱台から彭城に移り、自ら項羽・呂臣

の軍団を併せ率いたという。項羽本紀はそれを「恐」れてのことと記すが、恐怖のために前線に近い地域に出てくるというのは理解しにくい。懷王は自ら楚軍団の実権を掌握するために根拠地を移動したものと考えなくてはならない。また懷王はその際に呂臣を司徒、その父である呂青を令尹に任じている。これらの一連の動きは懷王の地位が必ずしも名目的なものではないことを示唆する。さらに呂臣が薛の会以降に臣従していた対象が項梁ではなく楚懷王だったこと、呂臣及び旧張楚軍団の楚政権に対する影響力が決して軽視できるものではなかったことも推測させる。

以上のように、項梁死亡時点までの楚政権においては、懷王にかなり近い位置に陳嬰・呂臣（及び呂青）がおり、項梁・項羽は楚政権内の最有力者では必ずしもなかった。この時期までの項梁集団は他の有力諸集団と並ぶ—その中では最有力の一軍ではあっただろうけれども—楚王権を支える一軍団に過ぎない存在だったものと思われる。

三―三 救趙戦争と項羽の楚軍掌握

楚軍を破った章邯軍は攻撃対象を趙に転じ鉅鹿を囲んだ。これに対して、趙からの度重なる救援依頼に応えて救趙戦に乗り出した楚懷王は、宋義を上將軍に任じ軍の全権を与え諸別將を統括させた。この時項羽は次將、范增は末將に任じられた。⁽²⁾

行軍して安陽に着いても、宋義は軍を四十六日間とどめて前進しなかった。項羽は言った。「わたしは秦軍が趙王を鉅鹿で包囲していると聞いていますが、素早く兵を率いて黄河を渡り、外から楚が攻めて、内から趙が応じれば、秦軍を破ることができましょう」。それに対して宋義は「そうではない。……いま秦は趙を攻め、勝てば秦の兵は疲れるので、われわれはそれに乗ずるべきである。秦が勝たなければ、兵を率いて西に進軍すれば、必ず秦を破り得よう。故にまず秦と趙を戦わすのが良い。……」⁽³⁾と言い、……そして子の宋襄を遣わして斉相とし、自ら送って無塩に行き、

飲酒高会した。このときは寒く大雨がふり、士卒は凍え飢えていた。

行至安陽、留四十六日不進。項羽曰「吾聞秦軍困趙王鉅鹿、疾引兵渡河、楚擊其外、趙應其内、破秦軍必矣」。宋義曰「不然。……今秦攻趙、戰勝則兵罷、我承其敝。不勝、則我引兵鼓行而西、必孥秦矣。故不如先秦趙。……」。……

乃遣其子宋襄相齊、身送之至無塩、飲酒高会。天寒大雨、士卒凍飢。(項羽本紀)

宋義は趙に向かつて進軍しながら、安陽で四十六日にわたり軍を停止させた。また息子の宋襄を齊に遣わして宰相とした。宋義は自ら息子を無塩まで送りそこで酒宴を開いたという。このような宋義の動きは項羽の激烈な反発を招いた。怒った項羽は、楚王より宋義誅殺の命を受けたと偽って宋義を殺害、これにより項羽は軍内で假上將軍となり、懷王はこれを追認して項羽を上將軍に任じた。秦楚之際月表によれば項羽が宋義を殺害したのは二世三年十一月のことである。

このような一連の事態により、項羽は名実ともに楚軍団を掌握することになった。項羽はクーデターにより軍の実権を掌握し、それは楚王の命を偽ることによるものだった。クーデターが懷王によって追認されたのは、それが楚の根拠地から遠く離れた場所で行われたため、またクーデターにより項羽の手中に落ちたのが楚の主力軍だったため、懷王側からの手出しが困難だったという空間的・物理的な現実的理由が大きいだろう。しかしそれだけでは項羽が楚軍団の支持を得てそれを救趙戦に結集し得た理由を説明したことにはならない。それではなぜ項羽の行動は楚軍団の支持を得ることにつながったのだろうか。

四十六日間の軍団停止を項羽は宋義の裏切りと解釈した。しかし宋義はかつて項梁によって使者として齊に送られたことがあり、自らの息子を齊の宰相として送り込もうとしていることから、齊との間に何らかの太いパイプを持つ人物だったことが推測される。上に見た宋義の発言に従うならば、その基本戦略は秦・趙の共倒れに乗ずること、その上でさらに齊との共闘を構想していたようである。

かつて秦嘉は公孫慶を使者として斉と手を組もうとし、項梁も対秦戦争開始前にも斉に共同出兵を依頼している。斉との連合はこの時期の楚域の有力者にとってごく自然に浮かび上がってくる課題だったのである。またこのことは楚には単独で対秦戦争を貫徹する力はないとするのがこの時期の一般的な見方だったことを示唆する。高祖本紀には宋義が上將軍に任じられた時のこととして次のような記事がある。

（懷王は）諸將と約を結び、先に関中に入りこれを平定した者は王とすることにした。この頃、秦軍は強力で、勝ちに乘じては敗軍を追撃しており、楚の諸將には先に入関することを望む者はなかった。

与諸將約、先入定関中者王之。当是時、秦兵強、常乘勝逐北、諸將莫利先入関。

救趙戦争開始時点では楚軍が秦軍を圧倒するような状況は想定されていなかった。このような情勢の中で、宋義は斉との協力体制を構築することによる楚の政治的安定・軍事的強化の達成を模索しており、その方針自体は非現実的なものでも利己的なものでもなかった。宋義にとって趙を救うこと自体は最優先で処理すべき課題とは考えられていなかったことになる。

これに対して救趙という行動に強くこだわったのが項羽だった。実のところ、宋義誅殺までの項羽に関しては、裏城で敵を穴埋めにして殺害したことや沛公とともに成陽を陥したこと、李由を斬ったこと等が見えるが、全体として項梁配下の一將軍以上の存在感は見出し難い。ここまでの項羽は多くの人をその周囲に結集し得るような力を見せたり業績を挙げたりする機会を持たなかった。

項羽は宋義殺害に際して、兵士が食糧不足で飢えているのに宋義が「飲酒高会」していたことを批判している。戦国期の兵書では將軍が配下の兵士を身内の如く扱うことが善とされ、そのような観点からすれば宋義の行動は軍団の力を低下させるものでしかなかった。また救趙を名目とした軍を任されながら我が子を斉相として斉に送り込む行動は、項羽には

王命を無視して私利を求める行動と解釈された。⁽²⁵⁾ 項羽の宋義殺害はきわめて倫理的な動機から遂行されたのである。

とすれば、宋義殺害・救趙戦争貫徹は項羽の、兵士に対して厚く配慮し信義を以て他を救う人格的力の証明として機能したのではないか。項羽は配下の將兵を救い楚に助けを求めてきた趙を救うために、懷王の命に反する危険を犯して宋義を殺害した。あるいは項羽には宋義こそ懷王による救趙の命をないがしろにする者、宋義殺害こそ懷王の真意に沿うものとの認識があつたのかもしれない。

戦国漢初においては自己の利害生死を無視してでも信義を尽す気節の持ち主がしばしば「賢」と称された。『史記』の中では項羽は「賢」者と評されることはない。劉邦のネガとして項羽を描く『史記』にとつてそれは当然の姿勢だろう。しかし宋義殺害時の項羽の行動はこの時期における賢者のそれと通じる面を持っており、当時においては賢者こそが理想的な人間集団を形成するためのキーパーソンだったのである。⁽²⁶⁾ 項羽がこの時期に見せた一連の行動は、当時において価値あるものと認められる行動のコードに沿った、秦末期の人士の信望を集め得るものだったのである。

懷王に承認されることで名実ともに楚軍の中樞を掌握した項羽は対秦戦争に邁進する。まず黥布・蒲將軍を先陣に鉅鹿を救援、続いて項羽自身も黄河を渡り秦軍を撃破した。項羽本紀はその時期の楚軍を「楚兵、諸侯に冠たり」と評している。王離・涉間らを破った戦争の後には項羽は「諸侯の上將軍」となり諸將はみな項羽に服属したという。宋義誅殺と救趙戦争の貫徹によつて項羽のもとに結集した楚軍は、対秦戦争の実績を根拠として楚国以外の諸勢力をも統合するに至つた。

ここまで見てきたように、項梁集団が項羽の下に再結集しより大きな形で再生するには、集団の中核たる項羽の行動、すなわち信義を以て他国を救い、対秦戦争において実績を挙げるといふ二つの具体的な行動が必要だった。楚国復興に大きな役割を果たした項梁集団は集団の結集の中核だった指導者項梁を失つたが、実績あるリーダーの死去から若いリーダー

への交代という困難な時期を項羽の果敢な行動によって乗り切り、以前から項梁・項羽に従っていた軍団に救趙戦に動員された楚国主力軍、対秦戦に参加した旧六国諸勢力を統合した項羽集団として再生することになったのである。²⁷⁾

四 項羽政権の成立

四一 十八王の封建

救趙戦争に先立っていわゆる懐王の約が提示された。

趙が何度も救援を要請してきたので、……懐王は諸將と約を結び、先に関中に入りこれを平定した者は王とすることにした。……楚の諸將には先に入関することを望む者はなかった。項羽のみが秦が項梁軍を破ったことを怨み、奮つて、沛公とともに西に進撃して入関することを願った。懐王と諸將は……遂に項羽を許さず、沛公に西進を命じるごととし、陳王・項梁の散卒を吸収させた。

趙救請救、……懐王与諸將約、先入定関中者王之。……諸將莫利入関。独項羽怨秦破項梁軍、奮、願与沛公西入関。懐王諸將皆……遂不許項羽、而遣沛公西略地、收陳王・項梁散卒（高祖本紀）。

この記事によれば軍事行動に関して懐王とその側近たちに意志決定権があるのは明らかである。この場合の項羽はどの方面に派遣されるかを懐王らによって決定される一將軍に過ぎない。

このうち項羽による宋義殺害や、救趙戦争の完遂・咸陽攻略があり、楚軍内の力関係にも前章で検討した過程を経ての大きな状況の変化が発生し、項羽の軍事的権限は著しく強大化した。しかし懐王の約は有効性を保ち続けていた。咸陽平定後、項羽に戦後処理を問われた懐王は自らの約を守ることを命じている。

項羽は人を派遣して懷王の命を尋ねた。懷王は「約の如くせよ」と言った。そこで懷王を尊んで義帝とした。項羽は自ら王たらんと欲し、まず諸將相を王にしようとした。曰く、「天下の兵乱が発生した時、仮に諸侯の後を立てて秦を討った。しかし自ら被堅執銳して事にあたり、野外に身をさらすこと三年、秦を滅ぼし天下を平定したのは、全て將相諸君とわたしの力である。義帝は功績はないが、もとより地を分けて王とすべきである」と。諸將はみな「それが良い」と言った。そして天下を分割し、諸將を立てて侯王とした。

項王使人致命懷王。懷王曰「如約」。乃尊懷王為義帝。項王欲自王、先王諸將相。謂曰「天下初發難時、假立諸侯後以伐秦。然身被堅執銳首事、暴露於野三年、滅秦定天下者、皆將相諸君与籍之力也。義帝雖無功、故當分其地而王之」。諸將皆曰「善」。乃分天下、立諸將為侯王。（項羽本紀）

ここでも懷王は自らの意志決定権を前提に命を下しており、名目だけの実権の伴わない存在と見ることはできない。高祖本紀には上の項羽本紀の記事と同じ内容が次のように記されている。

項羽は人を遣わして懷王に報告した。懷王は「約の如くせよ」と言った。項羽は懷王が自分を沛公とともに西に向かつて入関するのを認めず、北の趙を救援させて、そのため約に遅れることになったのを怨んでいた。そこで言った。

「懷王は我が家の項梁が立てた者で、攻伐の功績があるわけではなく、どうして約を司ることなどできよう。もともと天下を平定したのは諸將とわたしである」。そして懷王を偽り尊んで義帝とし、實際にはその命令を聞かなかつた。

項羽使人還報懷王。懷王曰「如約」。項羽怨懷王不肯令与沛公俱西入関、而北救趙、後天下約。乃曰「懷王者、吾家項梁所立耳、非有功伐、何以得主約。本定天下、諸將及籍也」。乃詳尊懷王為義帝、実不用其命。

項羽は懷王の命令に不満を感じてもとりあえずは懷王を義帝に格上げすることでそれが自分より上位にあることを周囲に示さざるを得なかつた。またここでの懷王の姿勢は、懷王が反秦戦争遂行過程における項羽の行動を全面的に是認して

いるわけではないことを項羽に感じさせるものだったのではないか。対秦戦争中の項羽にはいくつかの重大な独断的行動があつた。項羽の宋義殺害は懐王の命と偽つての行動で、懐王政権は客観情勢を鑑みてそれを追認したが、秦滅亡後は関中平定の功を項羽に帰すことを否定した。また項羽は降伏してきた章邯に懐王政権の承認なしに雍王位を与えている。懐王の命令は、懐王政権が論功行賞の主体となつた場合に項羽に与えられるであろう評価への懐疑を呼び起こすものだったのではないか。ここにおいて項羽は懐王政権下の一將軍として楚に帰還することの危険を予測することになつたものと思われる。

懐王の命に対して項羽は、懐王に「義帝」の尊号を与えつつ、天下を分割し懐王もその一部となる体制の創建を提案した。それは項羽と戦場をともにした諸將によって認められた。その新体制における王の顔ぶれは以下のようなものである。

	王号	封建された人物	項羽本紀の関連記事
旧秦	雍王	秦将章邯	
	塞王	秦将長史欣	「故為櫟陽獄掾、嘗有徳於項梁」
	翟王	秦将董翳	「本勸章邯降楚」
	漢王	沛公劉邦	
旧魏	西魏王	魏王豹	
	河南王	瑕丘申陽	「張耳嬖臣也。先下河南、迎楚河上」
旧韓	韓王	韓王成	
	殷王	趙将司馬卬	「定河内、數有功」
旧趙	代王	趙王歇	
	常山王	趙相張耳	「素賢、又従入関」
旧燕	遼東王	燕王韓広	
	燕王	燕将臧荼	「従楚救趙、因従入関」
旧齊	膠東王	齊王田市	
	齊王	齊将田都	「従共救趙、因従入関」
	濟北王	齊王建孫田安	「項羽方渡河救趙、田安下濟北數城、引其兵降項羽」
旧楚	九江王	黥布	「為楚将、常冠軍」
	衡山王	鄱君呉芮	「率百越佐諸侯、又従入関」
	臨江王	義帝柱国共敖	「将兵擊南郡、功多」
	西楚霸王	項羽	

これにより戦国七雄の並立体制は、十九の新しい国に切り分けられるかたちで再編されることになった。またこの中には義帝が見えず、それを含めると二十の国が立てられたことになる。⁽²⁸⁾ さらにこのことを記す項羽本紀の記事の後には、対秦戦争開始時に出兵要請に従わず項梁死去の一因となったとみなされた田栄が王に封じられなかったこと、陳余が三県を封じられたこと、鄱君の将梅鋗が十万户侯に封じられたことが特記されており、この時に上記の十九王以外のさらに小さな単位における封建も行われたことがわかる。クーデターによって項羽に掌握された楚軍は、旧六国連合軍となって秦を滅亡に追い込み、さらに項羽主導の封建を実行に移すことで、楚懷王政権から自立した政治的実態を有する項羽政権に転化した。

四―二 十八王封建の特徴

項羽によって封建された王の顔ぶれからは、次のような特徴を見出すことができる。

まず第一に、救趙戦争への協力と項羽に従つての入関が、封建の理由として高い比重を占めている。救趙戦争は前節で検討したように項羽のリーダーとしての資格を確定することになった戦争である。また入関は懷王の約の実質的な実行者として自らを位置づけるためには不可欠な手続きで、共に入関した諸將の存在は自らの入関が劉邦と異なつて各地の將軍たちの支持を得てのものであることを主張する意味を持ったものと思われる。楚の政権中枢から遠く離れた場所で軍事力の掌握を物理的根拠として成立したクーデター政権たる項羽政権においては、論功行賞はクーデターないしはクーデター政権の正当化に協力した者たちが中心的対象とされ、「斉將」田都・「燕將」臧荼といった各国の將軍や、「百越」を率いて参戦した呉芮、済北数城を下した上で兵とともに項羽に降つた田安のような軍事的指導者層が封建対象となった。なお張耳と陳余の待遇の違いもこのことに関わっている。張耳陳余列伝には次のような記事がある。

陳余の客は項羽に説いて次のように言った。「陳余と張耳は、趙における功績は一体であります」。項羽は陳余が入関に従わなかったので、彼が南皮にいることを聞き、南皮の隣の三県に封じた。……張耳の就国に、陳余はいよいよ怒り、言った。「張耳と陳余の功績は同等なのに、張耳は王、私だけが侯にすぎないのは、項羽の不公平である」。

陳余客多説項羽曰、「陳余・張耳、一体有功於趙」。項羽以陳余不從入関、聞其在南皮、即以南皮旁三県以封之。……張耳之國、陳余愈益怒、曰「張耳与陳余功等也、今張耳王、余独侯、此項羽不平」。

項羽と入関を共にしたか否かは、王位を得ることができるか否かに結びつくような重大事と考えられたのである。

第二に、十八王封建の実行直前に王位にあった者は、項羽によって殺害された秦王以外は、義帝と尊称された楚懷王も含めて、全員封建の対象となり王位に就いた。しかし同時に、項羽は従前の王がそのままの王名を称することを忌避した。燕王韓広は遼東王に、斉王田市は膠東王に、魏王豹は西魏王に、趙王歇は代王に遷されている。韓王成のみは韓王のままだったが、実際には就国することなく、項羽によって彭城に同行させられて侯におとされ、遠からず殺害された。あるいは楚懷王を義帝と尊称したのもそのまま楚王を名乗らせること自体を避けた結果かもしれない。また魏豹彭越列伝には次のような記事がある。

魏豹は亡命して楚に走った。楚懷王は魏豹に数千人を与え、魏地を回復させた。項羽が秦を破り、章邯を下した。豹は魏の二十余城を下した。豹を立てて魏王とした。豹は精兵を率いて項羽の入関に従った。漢元年、項羽は諸侯を封じ、梁地を欲して、魏王豹を河東に遷し、平陽を都とし、西魏王とした。

魏豹亡走楚。楚懷王予魏豹數千人、復徇魏地。項羽已破秦、降章邯。豹下魏二十余城。立豹為魏王。豹引精兵從項羽入関。漢元年、項羽封諸侯、欲有梁地、乃徙魏王豹於河東、都平陽、為西魏王。

魏王豹は楚の援助を受けつつ旧魏地を確保し魏王となり、救趙戦争にも参加し、さらに項羽に従って入関したにもか

わらず、西魏王に移された。項羽は救趙戦・入関に積極的に協力した人物であっても旧七国王家に対しては従前の王名の保全を避けた。こういった点において、項羽は戦国国家並立体制の破壊者である。

第三に、原則として王たちは自らと縁の深い土地で王位に就いている。燕では燕将臧荼が王位に就き、遼東王韓広とで旧燕が二分された。斉では斉を三分して田氏一族が王とされた。楚は項羽の西楚・義帝直轄領を含めて五つに分割され、王となった者はいずれも楚を根拠地とする人物と見られる。

三晋でも三晋出身者が王位に就いている。趙ではもとの趙相張耳が常山王に封ぜられ代王と旧趙を二分することになり、西魏王に遷された魏豹と旧魏を二分したのは「張耳の嬖臣」申陽だった。また韓も韓王成と殷王となった趙将司馬卬で分割されている。これらは全員三晋出身者と見られるが、その中の趙人の比重は他を圧している。このことは項羽政権に与つての救趙戦争の重みと対応する現象だろう。最後に秦を見ると、ここでも王位に就いているのは全員もとの秦将である。

このように項羽は基本的にはその地域の出身者を王位に就けている。十八王封建は旧七国を細分化し旧七国王家の王号を変更するという基本的方向性を持っていたが、同時に旧七国の枠組みをある程度認めるところに成立する地域性の濃厚な体制という一面も持っていた。その中で漢王に封じられた劉邦は唯一の例外だった。

第四に、この封建で王位を得た者たちは必ずしも項羽個人との距離が近い者たちではない。項氏一族や項羽の側近的位置にあった季布、鍾離昧のような將軍たちは封建の対象になっていない。旧六国連合軍を基盤とする項羽政権における論功行賞は、戦国期の国を細分化しつつも基本的な枠組みとしており、少なくとも封建の当初においては項羽の個人的な好悪の感情のみが前面に出たものなどではなかった。また陳嬰・呂臣等の懷王政権中枢メンバーも封建の対象ではない。項羽の封建は義帝直轄地を実態としては他の国と同質化するものだったため、義帝側近集団は義帝直轄王国内部にその地位

を得るにとどまったものと思われる。項羽政権は、項羽の側近たちを西楚の、楚の中枢勢力を義帝直轄王国のメンバーと見るところに成立するもので、そのような体制自体が項羽の義帝政権からの自立を意味していたのである。

四一三 十八王封建の論理

それでは項羽による封建はどのような意図と意味をもって実行されたのだろうか。項羽の封建が旧七国の枠組みを意識したものであることは前述した。しかし同時に封建によって戦国七国は小さく細分化され、戦国期のそれとは大きく異なったものになった。そしてそのような政治的方向性は楚の名家に生まれて江東で反秦戦を開始した項羽にとってはごく自然なものだったように思われる。

別稿で推論したように秦末の旧楚域は他国に比べて分立性が高く、有力な反秦武装集団の乱立傾向が強かった⁽³⁰⁾。そのような傾向は戦国楚の特質を反映するものである可能性が高い。藤田勝久によれば、戦国秦代の楚域は郡県制と封君・封邑が並立する統治構造をとっていた⁽³¹⁾。戦国楚は楚王による直轄支配が行き渡っていない地域を少なからず含んでいたと見られる⁽³²⁾。また秦末の楚王についても、旧王権の子孫を立てる必然性に関する意識が希薄で同時に複数の王が立つことへの抵抗感もなかったと考えられることはすでに言及したところである。

南方楚国は支配領域の広さもあってそれ以外の六国に比べて分権的性格が強く、それを制度的に分割することは他国に比べて容易だったものと思われる。換言すれば楚を全体として中央直轄支配体制下に置くことは相当に困難な事業だったのである。項羽による戦国諸国の細分化はそのような楚領域の特性に対応した体制を中国全土に適用するものとして発想されたのではないかというのが、本稿の提起する仮説である。

彭城を根拠地としたことはしばしば項羽の失敗と評価される。当時の中国全体の情勢の中では彭城は東南に偏り過ぎて

おり、東方の斉への備えとしては適していたが、真に重要な西方への備えは不十分だったといえる⁽³³⁾。しかしそのような見方が成立するのは、漢による統一という結果から発想される後世的な視点による部分が大きいのではないか。東南に偏った彭城を本拠地としたこと自体が項羽の世界観を表現していると考えべきである⁽³⁴⁾。項羽はあくまでも楚にこだわりの、諸国細分化による小国林立体制としての封建制を構想したものと考えられる。

項羽の封建体制は早い段階で自らが封じた諸王らによって否定される。封建後間もない時期に燕は分割封建された王の一人によって統一され、斉も封建の対象外だった田栄によって再統一される。趙は分割状態は続くがもとの趙王歇が陳余によって再び趙王となる。三秦も八月には漢に統一された。

六国連合軍を基盤とする項羽政権の存立根拠は滅秦の大義の存在と圧倒的な軍事力の掌握だった。しかし滅秦の実現により六国連合軍の存在意義はあらかた消滅した。さらに王たちの就国による連合軍の分散は、項羽政権の軍事的基盤そのものの解体を意味していた。項羽政権による封建は軍事力に依拠した強権的な諸王設置に過ぎず、その軍事力自体が解体すると中国全土は急速に従前の戦国七雄並立体制に回帰してゆく。項羽による義帝殺害は秦楚之際月表によれば諸侯就国からわずか半年後、項羽の封建体制が半壊した後の混乱状態の中でのことである。項羽の封建体制は十全に機能する時期をほとんど持たないままに崩壊したのである。

五 おわりに

大枠としては二百年以上続いた戦国七雄並立体制は当時の人々にとって自明の、いわば伝統的な体制だった。換言すれば、戦国末々漢初の中国において広汎に意識された「伝統的」な体制は、戦国諸国の並立体制以外にあり得なかつたので

はないか。秦帝国による統一も一時的な武力制圧という性格が強く、反秦抵抗運動の勃興は短期間での戦国七雄体制の復活に帰結した。戦国時代の「国」の枠組みに対する対応は、この時期の反秦抵抗運動が肥大化し政治的権力を掌握した時に必然的に目前に立ち現れてくる普遍性を持った課題だったのである。それは項羽集団も例外ではない。

当初は陳勝に呼応して反秦戦を開始した項梁集団は、陳勝死後は旧楚王家の末裔を王とする楚軍団の中樞となった。ただしこの時期までの項梁は必ずしも楚の最有力者ではなかった。項梁の死後、クーデターの成功により項羽は楚軍団を實質的に支配するようになり、救趙戦争・対秦戦争で自らの軍事的領袖としての力量を証明した。しかし対秦戦の戦後処理にあたり項羽集団と楚懷王政権の意向の齟齬が顕在化する。ここに至って項羽は懷王政権からの軍事力を根拠としての自立を志向することになった。十八王封建は自らの覇業に貢献した諸勢力に論功行賞を行いつつ義帝の勢力を直轄地のみに封じ込め、その上で項羽自身が王として自立するための政策だったものと考えられる。

封建の実行によって項羽集団は政治的実態を有する項羽政権に転化し、全国郡県化を推し進めた秦とは異なった政治方針を持つことを明示した。そして同時にその封建は旧七国の細分化という方向性を持つものだった。項羽の封建は、秦的な一元的郡県体制を否定するものだったが、戦国七雄体制の破壊という意味においては秦王朝と同様の性格を持っていた。封建実行時の項羽が乗り越えようとしたのは秦帝国ではなく、実体として目前に継続されている戦国七雄並立体制だったともいえよう。

これに対して、戦国期の「国」の枠組みをとりあえず承認する方向を採ったのが劉邦だった。劉邦政権は秦王権から多くの制度的遺産を引き継いだが、全土郡県化は行わず諸侯王を各地に配置し、諸侯王国領域の分割の程度は項羽政権の場合に比べてゆるやかだった。³⁵このことは劉邦政権が秦王朝とも項羽政権とも異なった存在であることを制度的に示すものである。楚・魏・斉という三つの戦国国家の狭間から生まれてきた民間勢力の長である劉邦は、強い地域的特性を持たな

い集団を長年率いてその傘下に様々な地域の出身者たちを従えていたが故に、諸地域の特性や各地の人間がもつ地域的アイデンティティをよく理解していたのではないか。漢初の諸侯王体制において、楚域が当初から戦国国家を分割するかたちで諸侯国化されたことはその傍証のように思われる。

註

- (1) 閻盛国はこういつた視点からの研究成果を①素質説②用人説③觀念説④心理説⑤地理説の五種類に類型化して論じている。閻盛国「二十年來項羽失敗原因研究述評」(「高校社科信息」二〇〇三年第一期)。
- (2) 田余慶「説張楚―関于亡秦必楚問題的探討」(「歴史研究」一九八九年二期)田余慶「秦漢魏晉史探微(重訂本)」中華書局、二〇〇四。
- (3) 陳蘇鎮「漢代政治与《春秋》学」(中国廣播電視出版社、二〇〇一)第一章第一節。
- (4) 李開元「漢帝国の成立と劉邦集団」(汲古書院、二〇〇〇)。
- (5) 藤田勝久「中国古代国家と郡県社会」汲古書院、二〇〇五、「項羽と劉邦の時代」(講談社選書メチエ、二〇〇六)。
- (6) 佐竹靖彦「項羽」(中央公論新社、二〇一〇)。
- (7) 柴田昇「史記」項羽本紀考」(愛知江南短期大学紀要」四二、二〇一三)。
- (8) 「史記」黥布列伝にも「章邯之滅陳勝、破呂臣軍、布乃引兵北擊秦左右校、破之清波、引兵而東。聞項梁定江東會稽、涉江而西」とある。
- (9) 陳勝之起也、布適見番君、与其衆叛秦、聚兵数千人。番君以其女妻之(黥布列伝)。秦末の呉芮集団については、吉開将人「漢初の封建と長沙国」(「日本秦漢史学会会報」九、二〇〇八)一四九〜一五二頁に言及がある。

- (10) 陳王初立時、陵人秦嘉、鉅人董緜、符離人朱雞石、取慮人鄭布、徐人丁疾等皆特起、將兵困東海主慶於郟。……秦嘉等聞陳王軍破出走、乃立景駒為楚王、引兵之方与、欲擊秦軍定陶下（陳涉世家）。
- (11) 楚王景駒始。秦嘉立之（秦楚之際月表、楚・二世二年端月）。
- (12) 陳勝等起兵、（張）良亦聚少年百余人。景駒自立為楚假王、在留。良欲往從之、道遇沛公。沛公將數千人、略地下邳西、遂屬焉（留侯世家）。
- (13) 沛公怨雍齒与豐子弟叛之、聞東陽甯君・秦嘉立景駒為假王、在留、乃往從之、欲請兵以攻豐（高祖本紀）。
- (14) 梁擊殺景駒・秦嘉、遂入薛、兵十余万衆（秦楚之際月表、項・二世二年四月）。
- (15) 柴田昇「史記」項羽本紀考」。
- (16) 章邯已破涉、困咎臨濟（『史記』秦楚之際月表、魏・二世二年端月）。
- (17) 儋救臨濟、章邯殺田儋。榮走東阿（秦楚之際月表、齊・二世二年六月）。
- 秦將章邯困魏王咎於臨濟、急。魏王請救於齊。齊王田儋將兵救魏。章邯夜銜枚擊、大破齊・魏軍。殺田儋於臨濟下（田儋列伝）。咎自殺、臨濟降市秦（秦楚之際月表、魏・二世二年六月）。章邯已破陳王、乃進兵擊魏王於臨濟。魏王乃使周市出請救於齊・楚。齊・楚遣項它・田巴將兵随市救魏。章邯遂擊破殺周市等軍、困臨濟。咎為其民約降。約定、咎自燒殺（魏豹彭越列伝）。
- (18) 魏豹亡走楚。楚懷王予魏豹數千人、復徇魏地。項羽已破秦、降章邯。豹下魏二十余城。立豹為魏王（魏豹彭越列伝）。
- (19) 田儋列伝。
- (20) 田假走楚、楚趨齊救趙。田榮以假故、不肯、謂「楚殺假乃出兵」。項羽怒田榮（秦楚之際月表、齊・二世二年九月）。
- (21) このことは高祖本紀でも「秦二世三年、楚懷王見項梁軍破、恐、徙盱台都彭城、并呂臣・項羽軍自將之」とされている。
- (22) 趙敖請救、懷王乃以宋義為上將軍、項羽為次將、范增為末將、北救趙（高祖本紀）。

(23) 使公孫慶使齊王、欲与并力俱進。齊王曰、聞陳王戰敗、不知其生死。楚安得不請而立王。公孫慶曰、齊不請楚而立王。楚何故請齊而立王。且楚首事。当令於天下。田儻誅殺公孫慶（陳勝世家）。

景駒使公孫慶讓齊、誅慶（秦楚之際月表、齊・二世二年二月）。

(24) 「尉繚子」戰威篇には「夫勤勞之師、將不必先己、暑不張蓋、寒不重衣、險必下步、軍井成而後飲、軍食熟而後飯、軍壘成而後舍、勞佚必以身同之。如此、師雖久而不老不弊。」とある。

(25) 將戮力而攻秦、久留不行。今歲饑民貧、士卒食芋菽、軍無見糧、乃飲酒高會、不引兵渡河因趙食、与趙并力攻秦、乃曰「承其敝」。夫以秦之強、攻新造之趙、其勢必拳趙。趙拳而秦強、何敝之承。且国兵新破、王坐不安席、埽境内而専屬於將軍、国家安危、在此一挙。今不恤士卒而徇其私、非社稷之臣（項羽本紀）。

(26) 柴田昇「秦漢時代の賢と孝―戦国末期～前漢前半期の人物評価と人材登用―」（『地域と人間から見た古代中国―江村治樹教授退職記念中国史論集―』名古屋中国古代史研究会、二〇一三）。

(27) なおここで述べたのはあくまでも項羽が軍団の領袖たり得た根拠であって、項羽が対秦戦争に勝利した原因ではない。項羽の成功・失敗自体を結果論ではない形で論じることが本稿の手に余る課題である。

(28) 義帝直轄領の位置に関して、藤田勝久は呉芮・黥布・義帝の領地がほぼ「南楚」に当たるとする（『項羽と劉邦の時代』一四一頁）。佐竹靖彦も南楚を義帝の領地とみる（『項羽』二二六頁）。これに対して平勢隆郎は「西楚を項羽が領有し、東楚が懷王の直轄領になった」とする（『史記の「正統」』講談社学術文庫、二〇〇七、五〇～五一頁）。

(29) 豹救趙（秦楚之際月表、魏・二世三年十二月）。

(30) 柴田昇「陳勝論ノート―陳勝呉広の乱をめぐる集団・地域・史料―」（『名古屋大学東洋史研究報告』三五、二〇一三）。

(31) 藤田勝久「中国古代国家と郡県社会」第一編第五章・第六章。

- (32) 山田崇仁は戦国楚における「疆域の連続化」について「広大な地域をどこまで領域化できたか疑わしい」とし戦国楚が春秋的性格を色濃く残すことを指摘する。山田崇仁「春秋楚霸考」(『立命館文学』五五四、一九九八) 四六頁。
- (33) 岳慶平「西楚の歴史沿革」(曹秀明・岳慶平主編『項羽研究(第一輯)』鳳凰出版社、二〇一二) 二三五頁。
- (34) 王子今は彭城を首都にしたことの意義を積極的に評価する。王子今「論西楚霸王項羽『都彭城』」(『項羽研究(第一輯)』)。
- (35) 李開元は「劉邦の封建」を、「基本的には懷王時代にあった戦国七国の政局を回復させた」ものと評価する。李開元『漢帝国の成立と劉邦集團』一〇〇頁。

《付記》

筆者は、重近先生が静岡大学に赴任されたのと同じ年に静岡大学に入学し、二年次の研究室配属以来二六年にわたって教えを受け続けてきた者である。先生が指導教官でなければ大学卒業後も東洋史学を続けることはなかったし、先生からいただく励ましなしには今日まで歴史学を続けることはできなかっただろう。今はもうご冥福をお祈りするしかないのだけれど、できることならもう一冊、先生のご著作を読みたかったと、心から思う。